

健常者と同じ

スタートラインへ

きょう陸上大会の1500メートル出場

ダウン症の障害がある多治見市立陶都中学校1年の坪井大知さん(13)＝同市宮前町＝が、7日に愛知県で行われる陸上競技大会の1500メートルに出場する。坪井さんが、公式記録の出る大会で健常者と同じスタートラインに立つのは初めて。ダウン症は筋肉量の少なさや心肺機能の弱さから健常者と同じ競技で出場することは難しいとされているが、市民マラソンで積み重ねた経験を武器に、得意の長距離で記録に挑む。

(田中純太郎)

坪井さんは幼少期から療育の一環で体を動かしてきることが多かった。走る、走ることが日常になった。小学校入学前には2キロを走るようになった。今では毎朝2キロの通学路を走って登校するのが日課になっている。市民マラソンには小学生の頃から出場しており、昨年開かれた地元の「たじみ健康マラソン」では3キロにエントリーし、健常者と一緒

ることへの負担が大きいほか、転倒や強い振動によって首の神経を圧迫するリスクが指摘されている。トラック競技では、着地



母・敬子さんと走りの練習をする坪井大知さん(右)＝多治見市豊岡町

マラソン3キロ完走経験「1番になりたい」

のたびに体へ衝撃が伝わるため、長距離を走り続けることが体が容易ではない。全日本知的障害者スポーツ協会の斉藤利之会長は「ダウン症の人が、振動のある陸上競技や持続的に走り続けることは難しい場合が多い。3キロを走れるのは、並々ならぬ努力の成果だ」と話す。

初挑戦の舞台は、7日に愛知県美浜町の町運動公園陸上競技場で行われる「日本福祉大学陸上競技トラック競技会」。勢いそのまま、22、23日に東京都世田谷区の駒沢オリンピック公園総合運動場で行われる日本パ

合運動場で行われる日本パ
ラ陸上競技連盟主催の「オ
ール陸上競技記録会」に出
場する。いずれも申告タイ
ム別で健常者の選手と混走
する。坪井さんは「1番に
なりたい。インタビュを
受けてみたい」と、初めて
のトラック競技に向け胸を
躍らせる。

坪井さんの挑戦は、障害者スポーツの在り方を問いかける一歩でもある。母親の敬子さん(53)は、「健常者と障害者が同じ舞台で走ることには意義がある。自然に交流できる場がもっと増えてほしい」と願う。

障害区分の見直し進む

ダウン症の競技者の増加に伴い、近年はスポーツ大会で障害区分の在り方を見直しが進んでいる。ダウン症は知的障害の枠組みとして区分されてきたが、2027年に宮崎県で開かれる全国障害者スポーツ大会では、水泳と陸上でダウン症

のカテゴリーが新設される予定だ。

ダウン症は、通常2本の21番染色体が3本ある染色体疾患で、運動機能や知的な発達に遅れがあることが多い。パラリンピックなどのスポーツ大会では、ダウン症は知的障害の枠組みに含まれており、運動機能に関わる身体的特性が十分に考慮されていないとの声が出ている。